

第5節 古墳時代の周溝墓

1 新規に確認された周溝墓について

今回、B区東端で検出されたSD08は、直線的な溝跡である。調査範囲での形状規模をまとめると、底面が平坦で断面台形の南北に延びる溝跡で、幅2.20～2.52 m、深さ0.72 m、現存長5.5 mを測る。北側は調査区外に延びており、南側は崖面で削平され、弥生時代後期前半の竪穴建物跡SB23を切っている。SD08は次の理由から古墳時代前期初頭の方形周溝墓、もしくは前方後方形周溝墓であると判断した。

- ① 4次調査で、SD08の西側約40 mに確認された古墳時代前期初頭の方形周溝墓（SD03）と溝の規模や形状、方向が類似する（第117図）。
- ② SD08埋土および遺構付近の表土から古墳時代前期初頭の土師器片が出土している。調査区全体を見ても奈良時代以降の遺構は皆無で、遺物もほとんど認められない。
- ③ SD08の規模や断面形状が近隣遺跡に確認される前方後方形周溝墓の溝跡に類似する（第117図）。

今回の調査で古墳時代の土師器破片は4点出土しているのみであるが、SD08を周溝墓と考えると、その主体部は調査区外の東側となり、遺構外出土とした古墳時代前期の壺の口縁（第118図）は、周溝墓の区画内から出土したことになる。

調査区周辺は弥生時代中期後半から弥生時代後期前半まで居住域であったが、一旦途絶えた後、古墳時代前期には周溝墓が造営される墓域となったと理解したい。

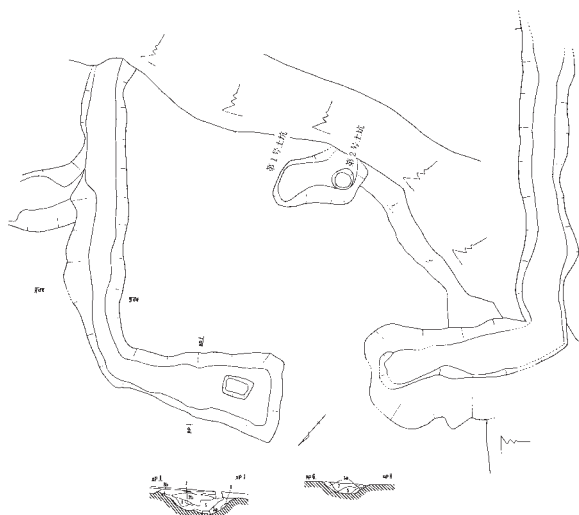
2 前方後方形周溝墓の可能性について

旧千曲川東岸の中野市安源寺城跡（中野市教委1999）で弥生時代後期末から古墳時代初頭の前前方後方墳丘墓2基、安源寺遺跡（中野市教委1995）で古墳時代前期の前前方後方形周溝墓1基が確認されている¹⁴。両遺跡は隣接しており、前前方後方墳丘墓と前前方後方形周溝墓は280 m程の距離である（第117・118図）。安源寺遺跡は南大原遺跡から南東に約1 kmの距離にあり、弥生時代後期の土壙墓群、方形周溝墓、竪穴建物跡等が確認されている。南大原遺跡SD03は方形周溝墓と報告されているが（長野県埋文2016）、南側は削平されており、前前方後方形周溝墓であった可能性があり、今回の調査で確認されたSD08についても同様である。近隣の前前方後方形の周溝墓・墳丘墓で全体形状が明らかになっているものはないが、後方部の一辺の長さや溝の幅と深さを比較すると第23表のとおりとなる。いずれも周溝幅は2 m前後で、断面形状は底面が広く平坦となる台形であり、南大原遺跡SD03・SD08は近隣の前前方後方形の周溝墓・墳丘墓の周溝と調和的である。

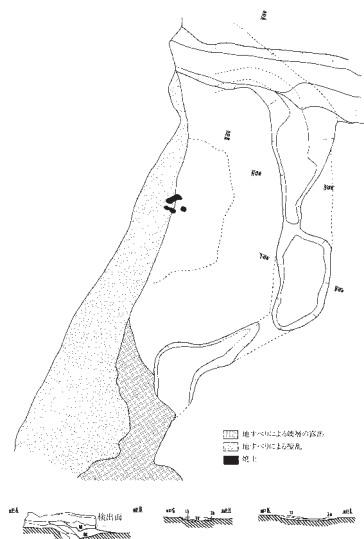
第23表 中野市域から検出された墳丘墓・周溝墓の規模

名 称	後方部一辺 (m)	周溝幅 (m)	周溝深さ (m)
安源寺城跡1号前前方後方墳丘墓	約16.2 m	1.4～2.8 m	0.12～1.32 m
安源寺城跡2号前前方後方墳丘墓	推定7.8 m	最大約2.0 m	約0.3 m
安源寺遺跡前前方後方形周溝墓	推定17 m	約1.3～2.2 m	0.2～0.63 m
南大原遺跡SD03（4次）	推定12 m	1.15～2.2 m	0.2～0.58 m
南大原遺跡SD08	現存5.5 m	最大2.52 m	0.72 m

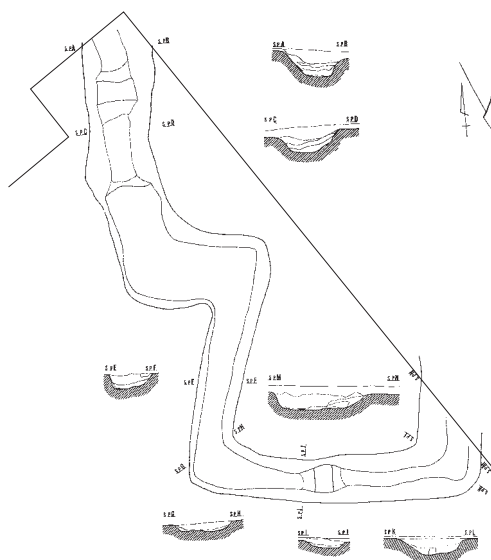
14 遺構名に用いた墳丘墓、周溝墓の名称は、それぞれの遺跡の発掘調査報告書の呼称に従っている。



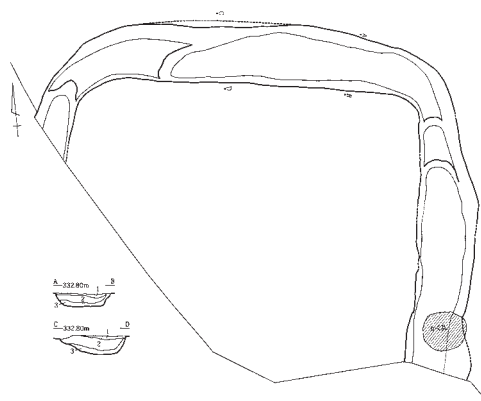
安源寺城跡 第1号前方後方形墳丘墓



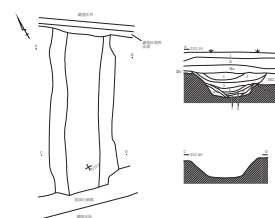
安源寺城跡 第2号前方後方形墳丘墓



安源寺遺跡 前方後方形周溝墓



南大原遺跡 SD03

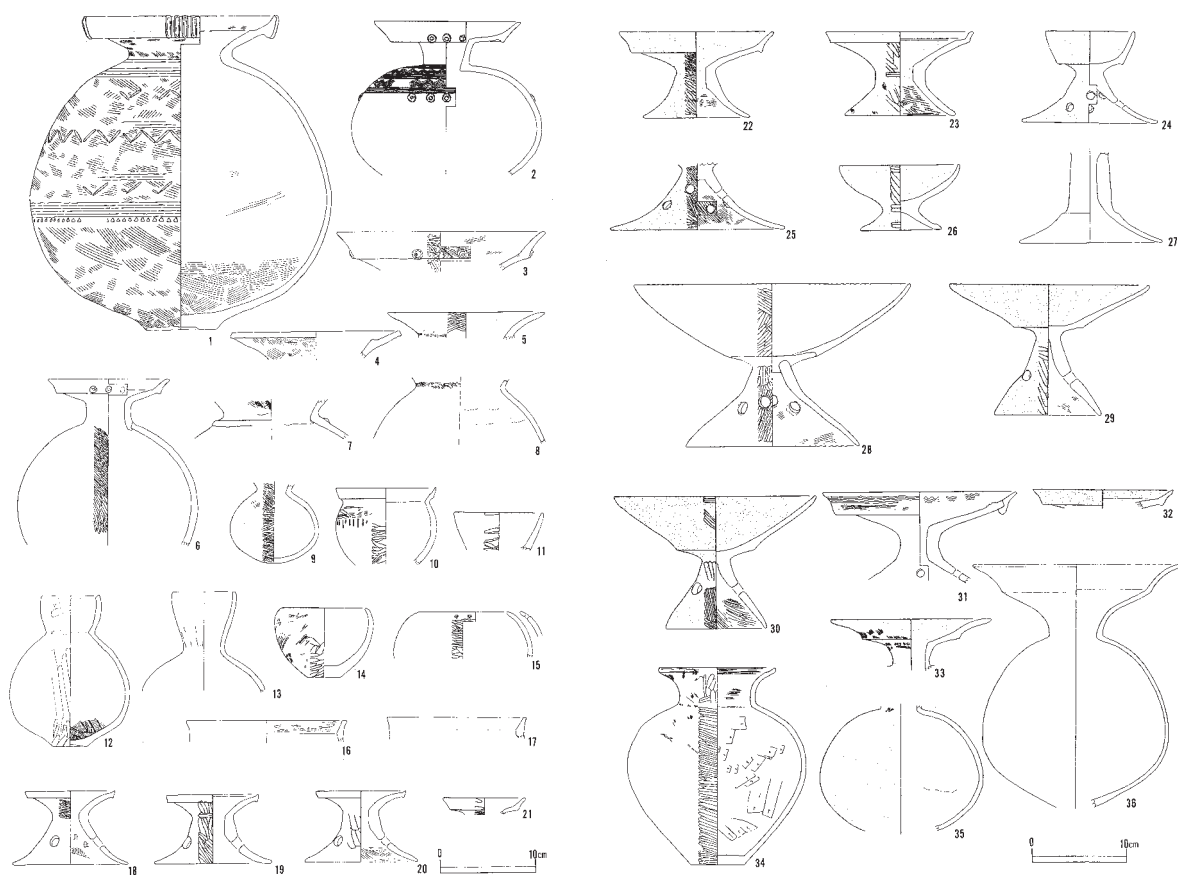


南大原遺跡 SD08

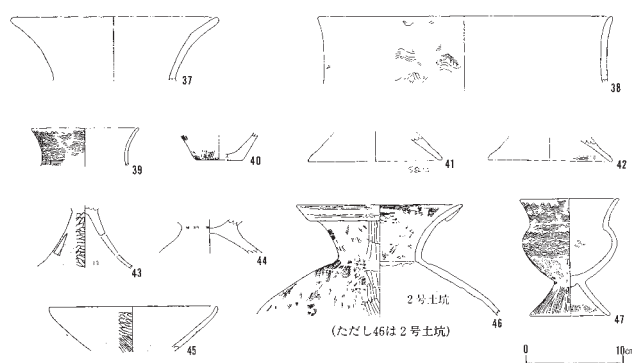
0 (1:250) 10m



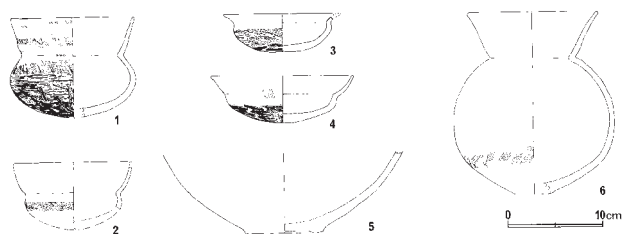
第117図 南大原遺跡、安源寺遺跡、安源寺城跡遺跡の周溝墓・墳丘墓



安源寺城跡 第1号前方後方形墳丘墓



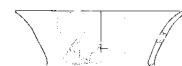
安源寺城跡 第2号前方後方形墳丘墓



安源寺遺跡 前方後方形周溝墓



南大原遺跡 SD03



南大原遺跡 SD08

0 (1:8) 20cm

第118図 南大原遺跡、安源寺遺跡、安源寺城跡遺跡の周溝墓・墳丘墓出土土器

安源寺遺跡、安源寺城跡遺跡の事例は、その距離が近いことから一つの墓域として認識できるものである。南大原遺跡はそこから少し距離を置いて、千曲川を挟んで対峙していたと考ええると、安源寺・安源寺跡とは区別された墓域であると理解できる。前方後方形の墓が安源寺遺跡・安源寺城遺跡だけのものではなかったのか、南大原遺跡にも存在するのかという問題は、長野盆地における前方後方形の墳墓成立の契機を考える上で、重要である。SD03・SD08 が方形周溝墓であったのか、前方後方形周溝墓であったのか、今後の未調査区での発見を待って議論を進める必要がある。

前方後方形周溝墓・墳丘墓は東海地方からの影響で成立したと考えられており、市内では七瀬遺跡等の弥生後期箱清水式期の集落跡から、S字口縁甕等の東海系の土器が報告されている（長野県埋文1994）。発掘調査は行われていないが中野市内最古段階と想定される前方後方形の蟹沢古墳との関係も今後追究すべき課題である。また少し視野を広げると、長野市北平1号墳が東海系の土器を多数出土する前方後方形墳丘墓である（長野県埋文1996）。長野盆地における古墳時代成立期における歴史を語るうえでも、南大原遺跡の周溝墓をどのように理解するかは、重要な課題といえよう。

引用・参考文献

長野県埋蔵文化財センター 1994『県道中野豊野バイパス志賀有料道路埋蔵部下財発掘調査報告書—長野県中野市内— 栗林遺跡・七瀬遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 19

長野県埋蔵文化財センター 1996『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7—長野市内5— 大星山古墳群・北平1号墳』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 20

長野県埋蔵文化財センター 2016『南大原遺跡 一般県道三水中野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 111

中野市教育委員会 1995『安源寺遺跡（長野市西部ディサービスセンター建設用地内）発掘調査報告書』

中野市教育委員会 1999『安源寺城跡遺跡発掘調査報告書』